

會を催しけり。于時中院也足軒も其の座につらなり給ひけるに、其の懐紙天下に流布す。後日豊臣秀吉公の聞に達しけるに、明智光秀と一味とて紹巴を近江の逢坂へ流され、也足軒をば加州安宅へ移されけり。也足軒配所にて召仕はれし女懐妊しけるが、也足軒は罪ゆるされて歸京せられし後、彼の女懐妊のまゝ小松の町人に嫁し女子を生す。此の女子既に十五・六歳に及びける時、岡嶋備中はいまだ喜三郎とて若盛なるが、能美郡小松に一宿す。折節彼の也足軒の息女を養育せし町家に泊りけるに、容顏美麗の娘あり。故に下婢を呼び、亭主の娘なるかと竊に尋ねけるに、亭主の孫にて、其の父は中院中將殿と申して京都より下向し給ひ、暫く富國に逗留し給ふ中に儲けられたり。その母は去方へ縁付き、既に死去せられたりと申しけり。喜三郎頓て宿の亭主に所望し、能州へ伴ひゆき、妻室とせられたり。其の腹に男女二人出生す。男子は市正と稱す。利長卿に奉仕し、慶長五年大聖寺の城責に討死す。女子は高島甲斐守に嫁娶を命ぜられたり。彼の備中守妻室は天下無双の美人なるのみならず、智恵才覺も無類なりしが、宿願の子

細ありて越中安居の観音堂を建立せらる。諸願成就の物語あれど爰に略すと云々。按ずるに、岡嶋譜に、元祖備中守一吉二男市正、母中院也足女と見ゆ、山山廣録に載せたる安居寺観音堂記に云ふ。加州侯之家臣備中守某妻法名月清出淨財新堂守(守)。以爲中興檀主。月清者中院也足之女。而原氏元寅之外高祖母云々。按ずるに、原氏は諸士系譜に、原九左衛門元慶室岡嶋市郎兵衛女とありて、其の子原五郎左衛門元成、其の子原九左衛門元勳、其の子原五郎左衛門元善とあり。元寅は其の嗣子なりと聞ゆ。

○小將町

元祿六年士帳に、小姓衆町或は御小姓町とあり。此の時代は如斯呼びたりしと聞ゆ。舊傳に云ふ。昔黃門利常卿の頃は小姓組の諸士をば此の地に集め置かれたため、小姓頭臨田九兵衛を初め小姓衆の人々へ邸地を賜ひたり。故に御小姓町或は小姓衆町と呼び、後には小姓町と呼べりと。一書にも臨田九兵衛直賢小姓組頭命ぜられ、小姓町にて邸地を賜ふ。陽廣公の時なり。とあり。按ずるに、萬治三年に記載せし臨田如鐵自記に、寛永廿年五月御小姓頭被命、料分二百

石拜領す。神尾主殿江戸より光高君御書持參、前田出雲守被申渡とあり。微陽兩公遺事に、陽廣公御代御小姓出來之刻、於途中御乘輿際へ被爲召、誰々に不奇、父母妻子等之儀御尋被遊といふ事見たり。按ずるに、右は寛永の末頃にて、則ち臨田九兵衛直賢を小姓組頭に命ぜられし頃の事なるべく聞ゆ。されば小姓町の小姓組の人々は少將光高君の時命ぜられし小姓共にて、其の時小姓町の町名を呼び初めたるならん。

○臨田九兵衛舊邸

延寶金澤圖に下の如く記載す。

右邸地に臨田氏子孫代々居住し、明治廢藩の際此の地を退去し、後島地となし、或は水田となしたり。今は其の遺名を稱するのみ。

○臨田九兵衛直賢傳

燕窩風雅に云ふ。直賢通名九兵衛、本姓金、韓人也。文祿元年朝鮮之役、浮田中納言秀家、將大軍至釜山浦、直賢父韓林學士金時省、防戰爲國死、時直賢僅七歲、爲秀家所擒、而來備前岡山。明年癸巳秀家夫人憐其孤弱、以有通家之誼

